

ハスヌマ通信 第11号

発行人 板倉直壽 (なおひさ) TEL/FAX 0548-29-0961

牧之原市を明るく強くする、行政への提言。住所 〒 421-0411 静岡県牧之原市坂口 2142 番地 1

2024.9.7 発行 「ハスヌマ」は家の屋号です。印刷所 アスクル (株) 東京都江東区豊洲 3-2-3

○御意見をお待ちしています。PC ginzanokaze@nifty.com 携帯 080-3420-8075 (ショートメール)

○私は、戦後のいわゆる自虐教育の中で育ちました。失われた日本人の誇りを取り戻したいと思います。



1、小中学校統合の白紙撤回を求めます。 第5回

～大規模な義務教育学校を造れば、①教育環境は悪くなり、②市の財政負担は重くなり、③小学校区共同体の衰退に拍車がかかります。～

Ⅲ、以下は教育委員会の主張とそれに対する反論です。 その2

(7) 1年生から9年生まで交流することができる。

1年生から6年生に比べて、1年生から9年生だと何がよいのでしょうか。

(8) 異学年交流がし易く、上級生への憧れや敬意、下級生への思いやりの心が育まれる。

6年制でも上級生への憧れや敬意、下級生への思いやりの心が育まれると思います。

(9) 異年齢など多様な集団活動を行うことができる。

6年制でも十分年齢差があり、異年齢など多様な集団活動ができます。

(10) 生徒が多ければいろいろなことができる。

①例えば、生徒が少ないと部活の種類が少ないので好きなことができないという声があります。部活には、校内の部活、複数の学校が合同とする部活、学校外の社会的活動としての部活などが考えられますが、「教員の働き方改革」により、部活は校外の専門家の指導に委ねるとい方向に向かっています。それに参加すればこの問題はほぼ解決されると思われます。

②6年制でも全校生徒でいろいろなことができます。これ以上生徒が増えても、既に子供も教員も多忙です。世の中全体が忙しい方向に進んでいますから。大規模校の不便があります。

③1学級だから、小規模校だから小回りが利いてできることがあります。

(11) キャリア教育(職業観教育=職業教育)ができる。

6年制の現在でも行われていますから9年制は必要ありません。

(12) 地域に根ざした活動ができる(コミュニティスクール)。

これは「学校運営協議会を設置した学校」の活動を意味し、地域の人々の協力を得ながら子供の教育を充実させることですが、すでに行われているので9年制は必要ありません。むしろ現在の狭い地域(と言っても数千人の人が住んでいます)でこそ、学校と地域との距離が近く、深い関わりができ、親密な市民の支援を得やすいのではないのでしょうか。2校にして校域が広がると、地域との距離ができて、関わり方に濃淡が出てくるかと思います。少なくとも現行の8校より良くなる理由がわかりません。

(13) 専門性を持った教師、多種多様な資格を持った職員を配置できる。

①義務教育学校なら、専門教師(数学、英語、音楽、技術、美術、体育など)、多種多様な資格を持った職員(養護教諭、保健師、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど)を配置することができる、だからすばらしいといいますが、10校の場合も必要な職員は配置すればよいし、1校では担当する生徒が少なく「不経済」なら、複数校を兼任させてもよいでしょう。小5、6年生は中学の教師が教えた方がよいというなら、中学教員の資格を持った人材を配置すればいいでしょう。従って必ずしも義務教育学校の特徴ではないと思われます。

②なお、たとえ専門教師や資格を持った職員が多数いても、大組織多人数の中でいつも忙しく立ち働いている、パソコンばかり見ている、会議ばかりしている、では生徒は置き去りにされかねません。規模が大きく、生徒、教職員が多数であるほど当然忙しくなり、この傾向は強

まるでしょう。小規模校・少人数学級ならしなくてもよい仕事が増え、余裕がなくなります。大事なことは1人1人の教員が熱心に親身に子供と関われる体制を作ること、それには余裕が必要です。大規模校は間違いなくこの余裕を失わせます。

因みにフィンランドの学校は授業が終われば午後3時でも教師は帰宅するとか。分業が進み、後を引き受ける職員がいるからだそうです。専門性や資格職員よりゆとりが大事だと思います。

(14) 専門性を持った教員が授業を行うことで、①分かりやすく、②躓きにも丁寧な指導が受けられ、学力向上につながる。

本当ですか？ ①分かりやすい説明は、専門性より教師の能力、熱意の問題だと思います。また、②丁寧な指導は教員に余裕が必要です。大規模校では忙しさに加速が付くだけですし、多人数学級より少人数学級の方がただそれだけで丁寧な指導ができるのは自明でしょう。

(15) 小学校教員と中学校教員が交わることで授業力の向上が図れる。

本当にそうなら、互いに交流して研修会を開いたらどうでしょう。授業力の向上は個々の教員がどれだけ努力して研鑽を積むかの問題だと思います。なお、忙しすぎて授業準備の時間などないと明言する教員の声もあります。教員を多忙から解放することが第一だと思います。

(16) 施設も設備も綺麗で最新の物になる。

「教育のあり方検討委員会」の委員の声の中に、義務教育学校を見学した時の印象として、「施設も設備も綺麗で最新性を感じた。こういう所で学ぶと子供の意欲も高まると思った」という感想がありました。しかし、これは理由にならない話です。

① 10校でも、長寿命化改修をすれば新築同様になりますし、改築も同様です。そこに、最新の設備と機器を導入すればよく、義務教育学校である必要はありません。

②新しいのは最初のうちで、どんな施設も5年も経てば色あせ、最新機器も古くなります。それでも学ぶ意欲が落ちないように、【学ぶ意欲はどこから来るのか】を考えるべきでしょう。

(17) 補足 スクールバスの問題点、特に解決不能と思われる点について述べます。

市はスクールバスを25台運行させ、費用は年間1億円かかると言っています。現状の10校なら不要なものを手間と費用をかけてわざわざ取り入れても教育環境は悪くなるだけです。

①下校時刻の自由と行動が制約される。

徒歩、自転車通学なら放課後は友達と好きなだけ遊んで好きな時刻に帰宅する自由があります。しかし、その自由がなくなりますから、この損失は多くの子供から楽しみを奪います。

②学校で部活があればバスが使えず、家族の送迎が必要となり家族に負担がかかります。

③学校への登下校で子供たちは友達と連れ添っていろいろ話をするだけでなく、いろいろなものを見たり、触れたりして、地域を知り、季節ごとの風景を記憶に留めますが、その機会が失われます。バスでは目に入らず、歩くことで初めて見えるものがいっぱいあります。

④放課後学級等が自宅から遠くなれば家族の送り迎えの負担も増えますし、歩いて自宅に帰る時の遊び、学びがなくなります。

⑤何かあって子供を迎えに行きたくても車がない親はタクシーを使うしかありません。

⑥バスの運転手がお老人で大丈夫でしょうか。幼い子、体調の悪い子など、いろいろな子がいるのでバスによる集団送迎は十分な注意が必要です。置き去り事件もあります。結局、バスをやめて家族が送迎するという場面が増えるのではないのでしょうか。

⑦雇用の延長等で、送り迎え担当のジジババが働くようになればそれができなくなります。

⑧雨の日など、学校近くの交差点や学校の入口あたりでの混雑は必至。危険性があります。

⑨バスや自家用車の交通整理、生徒の登下校の確認などで教員が忙しくなり、教員の負担は増えるでしょう。教員を忙しさから解放することが良い教育には不可欠なのに逆行します。

今回はここまでとして、次回以降の予定は第1回をご覧ください。（次回へ続く）

■後書き■ 最後までお読み下さり有り難うございます。